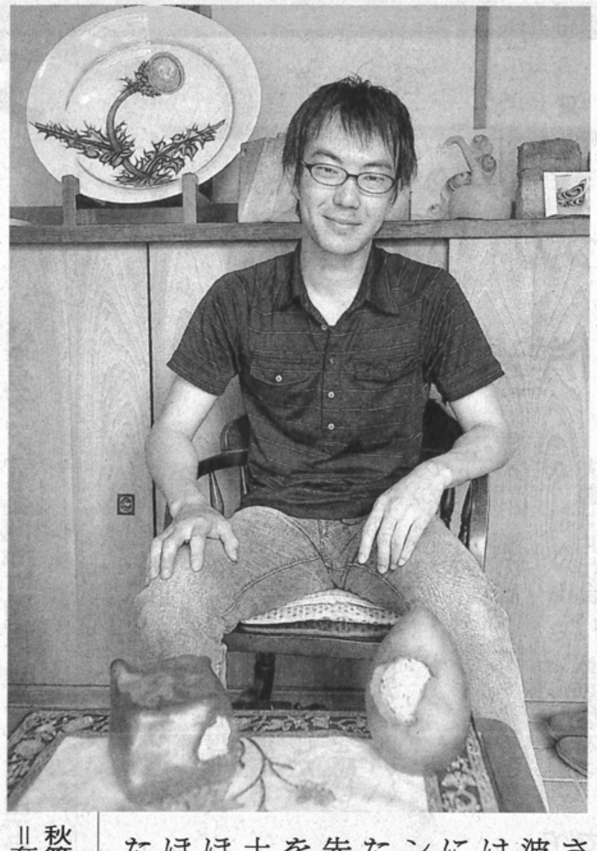
第3種郵便物認可

# 秋篠窯

# 3代目は博士

## 生物学から転身 今西泰赳さん(31)



秋篠窯3代目の今西泰赳さん＝奈良市

奈良市の秋篠寺にほど近い窯元「秋篠窯」は、80年前に開かれた。その3代目として活動している今西泰赳さん(31)は、分子生物学の研究で博士号を取得した異色の経歴を持つ。技術を学びながら、自分らしい表現を模索している。

細胞を思わせる四角いオブジェの一角が破れ、何かがあふれ出そうとしている。卵や心臓状の形、血管が絡み合うような文様も強い印象を残す。泰赳さんは「命のエネルギーが今の大きなテーマです」という。

秋篠窯は、人間国宝の富本憲吉氏に学んだ祖父の洋さん（故人）が1935年に開いた。志賀直哉らとも交流のある文化人だった。2代目の父・方哉さん(68)は文化庁研修員として在米経験もあり、自然をテーマに作陶を続けている。

秋篠の自然で育った泰赳さんは生物学にひかれ、筑波大学に進んだ。大学院では細胞内でエネルギー生産にかかわる小器官・ミトコンドリアの研究に没頭した。遺伝子研究の中でも最先端の分野だ。毎日データを取る実験や細胞の培養で土日も休めない。9年間、ほとんど帰省もできないほどだったが充実していた。

## 探究心「知」から「創作」へ

窯を継ぐことを真剣に考えるようになったのは修士課程にいた頃だ。祖父が亡くなった時、まだ小学生だった父は苦労して窯を受け継いだ。泰赳さんに芸術系の大学に進めと言ったことは一度もないが、気持ちは伝わってきた。研究が楽しくなる一方で、祖父と父が築いた窯で、ものを作り出す仕事をしたいという思いも膨らんでいった。暇をみつけて東京の美術館に通い、絵画や工芸に触れて感性を磨くようになった。

2012年11月に博士号を取り、それを一つの区切りに作陶家への道を進もうと決心した。信楽で2年間、土のこね方やろくろの使い方から修業した。この春からは石川県立九谷焼技術研修所の研究科で絵付けなどを学び、制作に励んでいる。

「博士までとったのに、もったいない」と言われる。だが無駄だとは思わない。研究で培った論理的思考や多角的な考え方は、美大や芸大を出た人とは異なると感じる。自己表現として作品を作る武器になる。「それに釉薬の調合や窯の焼成温度などで、理系的思考や計算を求められることもあるんですよ」

食器を量産し、陶芸教室で教えるよりも、土という素材を通して自己表現としての制作を目指したい。大学院の指導教官は「知りたいことを知ろうとすることが大切」と説いていた。「作りたい物を作る」ことを目指したいという。

方哉さんは「技術的にはまだ駆け出しで足りないところはたくさんある」と指摘しつつ、こう付け加えた。「本質を追究する作家がいない中で、分野は違っても学問の先端に身を置いたことが必ず生きてくる」

窯を開けて、思い通りに焼けていることは少ない。「意外性を楽しみながらも今は技術を磨く時期です」と笑う。祖父が見つけた秋篠の土と、父の方哉さんが考案した淡い緑の「翠篁釉」の土台に、何を加えられるのか。駆け出しの3代目にとって、模索の日々が続く。

（古沢範英）